

青少年育成センターだより

第4号 平成28年10月



思春期を迎えた子どもとの接し方について考えてみましょう

「中学生になって、子どもの扱いが難しくなった。どのように子どもと接すればいいのでしょうか」と保護者から思春期を迎えた子どもへの関わり方についての相談をよく受けます。皆さんのご家庭ではいかがですか。「うちの子どもは、素直に言うことを聞いてくれるのでそのような悩みごとはないよ」と言われる家庭もあります。思春期を迎えた子ども誰もが親や大人に反抗をするわけではありません。自分に対する肯定感が心に満ちている子どもには親に対する反抗が無かったり、少なかったりするようですが、多くの子どもたちはそうはいきません。思春期を迎えている子どもへの関わりは本当に難しいことと言えます。



大人の皆さんは「思春期」という言葉を聞き、自分のその時期を思い出される方もいらっしゃることでしょう。親や大人との衝突、好きな人や性への憧れ、自分の心や体への不安や悩み等、様々なことがあったことでしょう。このように皆さんの「思春期」の思い出は甘ずっぱいものとして残っているのではありませんか。

思春期の子どもへの接し方について考えるときに、自分が思春期の時期に「どのように考え、どのような行動をしていたか、どう接してほしかったのか」を思い出し接することが一番簡単な方法だろうと思われますが、私たち大人はかつて自分にも思春期があったことを忘れているものです。ここで一緒に思春期の子どもへの関わり方について考えてみましょう。

「思春期」は、体や心が大人になっていくための準備期間です。体は大人になりつつあるのに、心理的にはまだ子どもの部分が残っているため、心が不安定になります。そこで周囲の大人や親に対して反抗的な態度をとったり、時には本音ではないまったく逆の意思表示をしたりします。そのような思春期の子どもに私たち大人はどのように関わればよいのでしょうか。

子どもは不安を除くために様々な試行錯誤を繰り返します。大人はそのような子どもの姿を見ていると危なっかしさを感じるものですが、それを見守る余裕を持つことが大切です。その大人の見守る姿から、子どもは「自分には心配してくれる人がいる」「自分を信じてくれる人がいる」という思いを感じ、それが心の居場所になるのです。この居場所は、子どもの心の安定のためにはとても大切なものになります。

また、子どもに枠の意識を持たせることが大切です。この枠とは、門限や小遣いなどの物理的な枠、親の価値観や道徳観といった枠、また自分を慈しみ心配くれる存在を裏切ってはならないという心理的な枠。このような枠を子どもが絶えず意識しておかなくてはなりません。このような枠が無くなった時に、子どもは自分を受け入れてくれる悪い仲間と付き合うようになり、非行に走ったりするようになるのです。まさに今年、埼玉県で起きた少年による暴行死事件や昨年の川崎で起きた事件がそうだったのではないのでしょうか。大人や親が子どもにとって安心できる枠にならなければなりません。

子どもたちが道を外れそうになった時に、ふっと顔を思い出してくれ、子どもの心の中に存在し続けること、そんな大人や親でありたいものです。

思春期は、子どもにとって人生の荒波の中で小舟を漕いでいるようなものでしょう。私たち大人や親が子どもをしっかり見守り、支援してやるのが大切です。

問合せ先：防府市教育委員会生涯学習課 青少年育成センター（23-3013）